

論文

時間的展望の探索における PAC 分析の
有用性の検討

Usability of PAC Analysis Procedure to Inquire into Time
Perspectives

松浦 美晴*

Miharu Matsuura

キーワード: 時間的展望, 場の理論, PAC 分析

Key Words: Time perspectives, field theory, PAC analysis

緒言

時間的展望の定義

時間的展望の定義として, “ある与えられた時に存在する個人の心理学的未来及び心理学的過去の見解の総体”(Lewin, 1951)がよく知られている。これは, 都筑(1999)によれば, 時間的展望の認知的な側面に注目した定義とされる。都筑は, 時間的展望を, 認知的側面, 感情・評価的側面, 欲求・動機的側面から構成されるものととらえ, “個人の心理的な過去・現在・未来の相互連関過程から生み出されてくる, 将来目標・計画への欲求, 将来目標・計画の構造, および, 過去・現在・未来に対する感情”と定義した。時間的展望の動機的側面については, 白井(1996), Seginer & Lilach(2004), 都筑(2007)によっても取り扱われている。

時間的展望をとらえる手法

時間的展望をとらえる手法は, 国内外で多数開発されてきた(都筑, 1982)。

特に Cottle は, 時間的展望の測定技法を複数考案している(白井, 1989)。Cottle による代表的な技法として, サークル・テスト(Cottle, 1967)がある。これは過去, 現在, 未来を 3 つの円であらわすよう求める投影的技法であり, “時間的優位性”, “時間的関連性”, “時間的発展性”という 3 つの指標を得点化することができる。

日本においては, 白井が複数の手法を考案している。時間的展望体験尺度(白井, 1994a)はその 1 つである。時間的展望の持つ側面を表す, “希望”, “目標志向性”, “充実感”, “過去受容”の 4 つの下位尺度からなり, これらの尺度得点を算出することが可能である。

これらの手法を用いて時間的展望を得点化することにより, 他の変数との関連を検討することが可能となる。都筑(2007)は, サークル・テスト得点と, 進路選択に対する自己効力, 将来目標, 目

* 山陽学園大学総合人間学部生活心理学科

標意識、時間的態度、自我同一性地位との関連を、日瀧(2008)は、サークル・テスト得点と、時間的展望体験尺度得点ならびに精神的健康度との関連を調べている。

場の理論と時間的展望

Lewin による時間的展望の定義の背景には、場の理論(Lewin,1951)、すなわち、“心理学的な場における何等かの行動または何等かの他の変化は、その時における心理学的場のみ依存する”がある。場の理論においては、事態の内部にある孤立した要素を分析する前に、事態全体の特徴を調べることから始める分析、すなわち、“全体としての事態から出発する分析”が必要であり、その前提として、場全体の特性ともいべきものが存在し、ある特殊事情の下では、事態そのものを1つの単位として取り扱いうる、のだという(Lewin, 1951)。

場を構成要素に分けることについて、Lewin は次のように説明した。心理学が一般概念と法則を発展させる手続きにおいては、個人は個人差にもとづいてある水準に属することになる。個々の事例を属する水準内へ一般化することがカテゴリー化である。カテゴリー化されてしまえば、カテゴリーを表す概念から個々の事例に還ることはできなくなる。そこで、構成的方法をとることになる。すなわち、個々の事例を、“心理学的‘位置’、心理学的‘力’、及びその他これと同様な概念”という“若干の構成的‘要素’”間または要素の特質間の経験的關係を言語化した一般法則上に布置することによって、表現しようとするのだという(Lewin, 1951)。

先に紹介した時間的展望を得点化する手法は、事態としての時間的展望をその構成要素に分け、いずれかの要素に絞ってそれを操作的に取り扱ってきた。そして、要素間、あるいは要素と他の変数との関連の検討が、個人間分散における相関にもとづいておこなわれてきた。Lewin (1951)に沿っていかえるなら、一般法則上における個人の布置を弁別することで個人を表現しようとする、構成的方法をとってきたといえる。

しかし、Lewin(1951)は、事態全体を考慮せずに 1, 2 の孤立した要素を拾い出すことには、“大切なことがら、判断し得られない”危険があるとした。これにしたがえば、対象となる事象における時間的展望の研究を始めるにあたっては、構成要素を操作的に取り扱おうとする前に、事象における時間的展望全体の特徴を調べる必要があるといえる。そのための方法を確立しておくことが、Lewin の指摘した危険を回避するために有効であろう。

そこで本研究は、Lewinによる時間的展望の定義である、“ある与えられた時に存在する個人の心理学的未来及び心理学的過去の見解の総体”に立ち返り、時間的展望を総体としてとらえることを試みる。

時間的展望をとらえる手法としての PAC 分析

本研究は、時間的展望を総体としてとらえる面接手法としての、PAC(Personal Attitude Construct)分析(内藤,1997)の適用可能性を検討する。

PAC 分析とは、①刺激に対する対象者の自由連想、②対象者による連想項目間の類似度評定、③類似度距離行列を用いてのクラスター分析とデンドログラムの作成、④デンドログラムにもとづく対象者による解釈・イメージの報告、⑤総合的解釈、の手続きを通して、個人の態度やイメージの構造を分析する手法である。内藤(1997)によれば、次の利点を持つ。手続き①の自由連想により、対象者自身の持つ枠組みであるスキーマを通して連想項目すなわち変数を抽出でき、その構造の分析は、対象者独自のスキーマの構造の解明となる。また、手続き②において対象者が評定す

る連想項目間の類似度は、単なる“辞書的意味”のみでなく、“個人的経験の内容”、“コンプレックス”における類似度、または3つの複合における類似度である。手続き④では、そうした類似度による連想項目間のつながりとして形成されたクラスターを媒介として、対象者の現象世界を探索し理解していく作業を、実施者と対象者(内藤は、“実験者”“被験者”という表記を用いている。)が一緒になって行う。この、実施者が単独で解釈を行うのではなく対象者ととも解釈を検討するという点で、PAC分析を“現象学的データ解釈技法”と呼ぶことができる(内藤, 1997)。

ところで、現象学的アプローチによって時間的展望をとらえる研究は、すでに日高・吉田(1981)によっておこなわれている。日高・吉田はまず、フッサールの現象学的探求法を、行動と予測の制御に関心をおく現代の科学的心理学が見逃してきた人間経験の深い意味を探求しようとするものであり、一切の先入観を払拭して現象そのものを、また、研究者の意識に現れるままの現象の意味や本質構造を直観によって把握し記述しようとするものである、とした。その上で日高・吉田は、この現象学的探求法の難点を次のように指摘した。まず、この方法は研究者自身に依存した名人芸的なものにならざるを得ず、成果を追試し共同主観化することが困難だとした。また、“個々の実存”へと接近するためには、実存自体に自らの世界を“語らせる”必要があるが、語られた“ことば”によって示す、真に意味する内容を見出すことは困難だとした。これらの難点を解消するために、日高・吉田は深層個別面接の手法を用いた。この手法は、面接対象者の言葉の検討を容易なものとするため、面接側があらかじめ構造枠を設定しておき、その構造枠にもとづいた面接を行うものであった。構造枠の設定は、仏教や現代思想家の考え方における、人間と時間の関係にもとづいて行った。以上が日高・吉田の用いたアプローチである。

しかし、面接側が構造枠を設定することは、事象をとらえるためにあらかじめ要素を選択し、要素間または要素の特質間の関係上に対象者を布置しようすることを意味する。しかも、日高・吉田(1981)の設定した構造枠は仏教や現代思想家の考え方によるものであり、対象者個人のものではない。したがって、本研究の目的である、その時その個人に唯一無二の“個”にとつての“場”をとらえることにおいては、この手法は適さないといえる。

一方、PAC分析における構造枠の設定は、自由連想と連想項目間距離評定の手続きを通して対象者自身によっておこなわれるため、構造枠自体が、研究者がとらえようとする事象となる。しかも、日高・吉田(1981)の指摘した現象学的探求法の難点を回避することも可能である。すなわち、対象者の設定した構造枠によって結果の共同主観化が容易になるうえ、対象者の現象世界の探索を実施者単独ではなく対象者とともに行うことによって、対象者の語る“ことば”の内容を見出すことも容易となる。

以上が、本研究がPAC分析を用いる理由である。

本研究では、PAC分析を用いて対象者の時間的展望の総体を解釈するために、次の手続きをとる。PAC分析における、対象者による項目間類似度評定の際、対象者が連想した項目に加え、“自分の過去”“自分の現在”“自分の未来”という3項目(以下、“時間項目”と呼ぶ)を示し、これらを含めた項目間の距離評定を行うよう求める。この手続きにより、クラスター分析で得られる dendrogram 上で、連想項目は、連想項目間の距離だけでなく、過去、現在、未来という時間項目との距離にもとづいて布置されることになる。実験者と対象者が一緒になって、対象者の現象世界を時間的展望との関係において探索し、理解していくことができると考えられる。

本研究の目的

本研究は、時間的展望を総体としてとらえる手法として、時間項目を用いての PAC 分析を提案し、その適用可能性を検討する。

まず、時間項目を用いることの有効性を検討する。そのために、PAC 分析の際に作成する時間項目を用いたデンドログラムとは別に、距離行列から時間項目を除いたデンドログラムを作成する。時間項目を用いたデンドログラムに対してなされた対象者による解釈やイメージを用いながら、デンドログラム間でクラスター構造を比較する。

次に、時間的展望の外在化のための、クラスター構造を手がかりとすることの有効性を検討する。対象者の現象世界をとらえるためには、対象者が自らの内界をどこまで深く探索し語りなどの形に表出できるか、すなわち、外在化できるかが重要となる。面接法において、対象者が内界の深い部分まで外在化できるようにするには、それを助ける面接者の高い技量が必要とされる。それに対し、PAC 分析では、手がかりとして呈示されるクラスター構造が、対象者による自身の内的体験の外在化を助ける。内藤(1997)は、対象者における構造分析の進行を、“連想刺激からの自由連想、それらの構造の析出、構造への自由連想や構造の解釈、それら下位構造の輪郭や関係の明確化への進行手順は、‘連想刺激’を出発点として、‘自由連想’と‘まとめ’という作業手続きを繰り返すことで、次第に個人の内面深くを掘り下げ、深層構造の解明へと進んでいく作業に他ならない”と説明している。また、連想項目のクラスター構造を手がかり刺激として呈示することにより、連想項目単独で呈示するよりも対象者の連想価を飛躍的に高めるとしている。(これらについて内藤は、対象者の自我防衛の内に入り込む危険につながるとし、注意をうながしている。)この PAC 分析の利点について、時間的展望をとらえる上での有効性を、デンドログラムのクラスター構造と対象者の語りにもとづいて検討する。

なお、本研究は、“職業生活への移行を目前にした大学生個人の持つ時間的展望”を経時的に追跡するための、準備段階として行われたものである。

方法

PAC 分析の実施時期と対象者

PAC 分析による面接の実施時期は 20XX 年 11 月であった。地方私立大学の 3 年次に在籍する女子大学生 1 名を対象とした。対象者は実施時期において就職活動を開始したばかりであり、企業への就職活動と平行して、公務員試験の受験を予定していた。既に述べたように、本研究は、“職業生活への移行を目前にした大学生個人の持つ時間的展望”を経時的に追跡する研究の準備段階である。この対象者は、計画中の研究の対象者となるための条件を備えていた。対象者には、匿名性の担保、発言の録音とデータの管理、学会での公表の可能性、について文書と口頭で説明し、同意書により研究協力への同意を得た。

実施手続き

まず、口頭で次の教示を行った。“あなたは自分のこれからの進路をどのようにとらえていますか。進路を決めたり、決めた進路を実現したりするにあたって、どんなことを感じたり、考えたり、実行していますか。頭に浮かんできたイメージや言葉を、思い浮かんだ順に番号をつけてカードに記入してください。”対象者に、教示内容を刺激として自由連想反応を求め、さらに連想反応の重要な順に順位をつけるよう求めた。連想反応を連想項目とし、“自分の過去”“自分の現在”“自分の未来”という時間項目を加えた全項目をランダムに対にして対象者に示し、“非常に遠い”から“非常に近

い”までの 7 段階評定を求めた。こうして得た項目間距離行列を統計解析ソフト Kyplot3.0 に入力し Ward 法によるクラスター分析を行い、デンドログラムを作成した。内藤(1997)に従い、対象者と実施者が一緒になってデンドログラムを見ながら、クラスターのイメージを探索した。最後に、各項目単独に対しての+ (肯定的), - (否定的), 0(中立)の直感的イメージ評定を行うよう、対象者に求めた。以上の実施に 120 分を要した。

時間項目を用いないデンドログラムの作成

時間項目を用いることの有効性を検討するための比較材料として、項目間距離行列から時間項目を除き、Ward 法によるクラスター分析を行い、デンドログラムを作成した。

結果と考察

PAC 分析による面接時にクラスター分析により得られたデンドログラムを、Figure1 に示す。項目を重要度順に並べた項目間評定距離行列を作成し統計解析ソフトに入力したところ、重要度順位が上位の項目が下に配置された。これはソフトの演算手順の特性によるものと考えられる。クラスターの切断箇所については、実施者と対象者が一緒に考え、双方の了解によって決定した。内藤(1993)に従い、項目単独に対してのイメージ評定結果を用いて、各クラスター、全体のそれぞれについて、“感情(欲求)の強さ”を“プラスマイナスゼロの合計値”，“葛藤度”を“[プラス項目の数-マイナス項目の数]の絶対値+1 を分母とし、プラス項目の数+マイナス項目の数を分子とした値”，として算出した。対象者による解釈にもとづき、クラスターへの命名を行った。

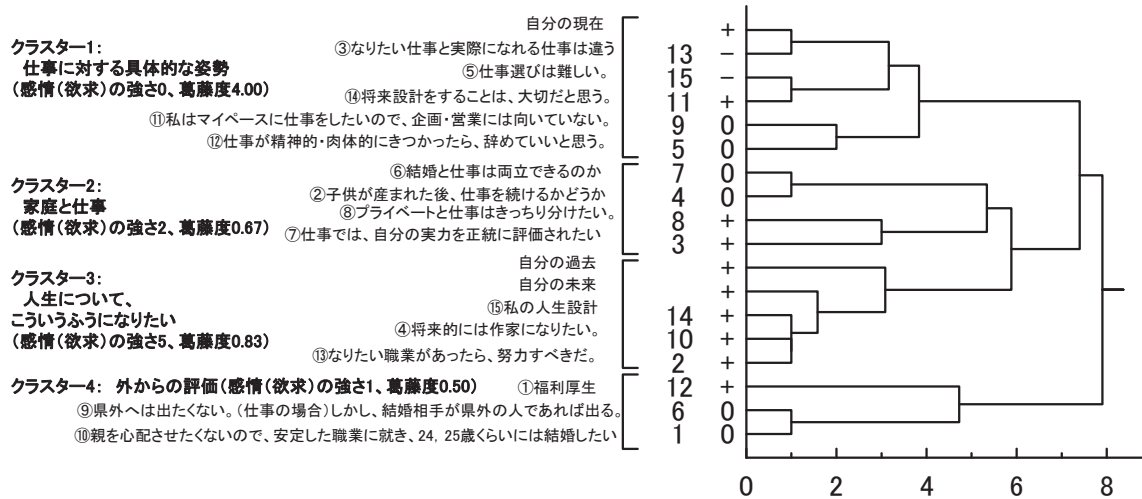


Figure 1 時間項目を用いたデンドログラム (丸数字は連想順位、数字は重要度順位, 全体の感情 (欲求) の強さ8, 葛藤度1.33)

時間項目を用いることの有効性

PAC 分析に時間項目を加えることの有効性を検討するための比較材料として、距離行列から時間項目を除いて作成したデンドログラムを Figure2 に示す。2 つのデンドログラムのクラスター構造

を、面接時に時間項目を用いたデンドログラムに対してなされた対象者による解釈やイメージを用いながら、比較してゆくことにする。通常の PAC 分析では、対象者によるクラスターのイメージ、対象者によるクラスター間の比較と全体のイメージ、実施者から対象者への補足質問、実施者による総合的解釈、の順で述べてゆくのであるが、今回は、デンドログラム間の比較に必要な結果だけを述べることにする。

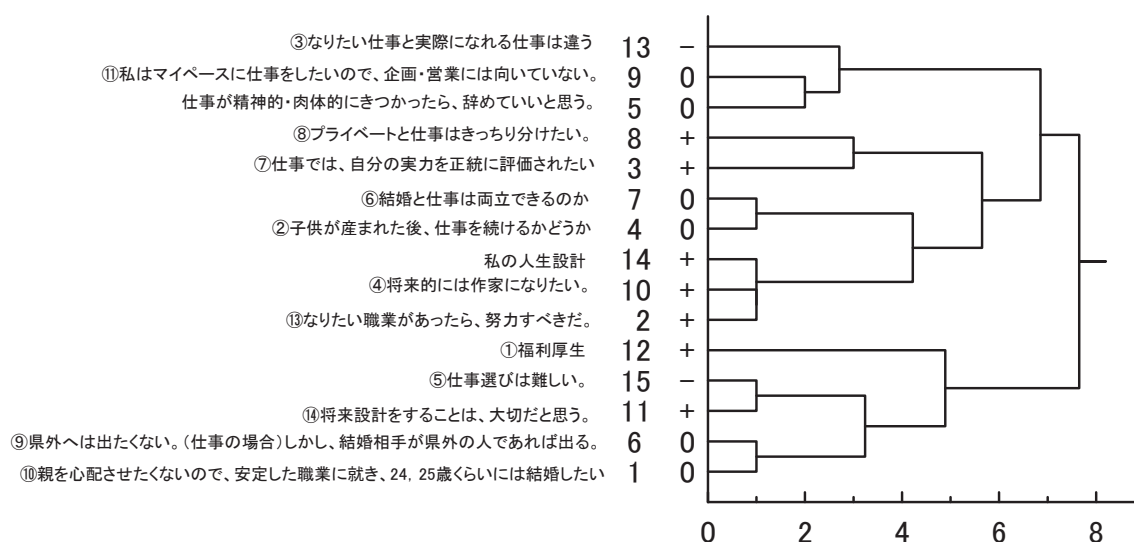


Figure 2 時間項目を用いないデンドログラム
(丸数字は連想順位、数字は重要度順位)

2つのデンドログラムを比較したところ、特徴的な相違点が2つみられる。1つは、時間項目を除いたデンドログラム(Figure2)では、“私の人生設計”“将来的には作家になりたい”“になりたい職業があったら、努力すべきだ”の3項目が、“結婚と仕事は両立できるのか”“子供が産まれた後、仕事を続けるかどうか”の項目と結節するのに対し、時間項目を用いたデンドログラム(Figure1)では“自分の過去”“自分の未来”と先に結節してクラスター3を構成していることである。

この相違に関すると思われる、時間項目を用いたデンドログラムに対する対象者の解釈とイメージとして語られた内容を、Table 1に示す。“結婚と仕事は両立できるのか”“子供が産まれた後、仕事を続けるかどうか”を含むクラスター2と、クラスター3との比較において、クラスター2が“生活の細かい心理的な部分”であるのに対し、クラスター3は“大きく人生をとらえた形”であると語られている。時間項目を加えて分析することにより、“生活の細かい心理的な部分”がクラスター2へと切り離され、“大きく人生をとらえた形”としてのクラスター3が別に形成されたと考えることができる。

クラスター3の+-0のイメージから算出された感情(欲求)の強さは5であり、強いといえる。さらに、補足質問に対して語られたクラスターの構造への対象者のイメージからは、母親が認めてほめてくれたから作家になりたいと思っていた“過去”が、頑張れば実現可能な“未来”への意志につながるとみることができる。過去の進路選択を回想することで自己肯定が高まり、進路選択の変化が生じることを、白井(1994b, 2001)が見出しているが、この様相が、時間項目を加えたPAC分析によってクラスター構造の形で示されたといえる。

相違点の2つめは、時間項目を除いたデンドログラム(Figure2)において、“仕事選びは難しい”

“将来設計をすることは、大切だと思う”の2項目が、“県外へは出たくない。(仕事の場合)しかし、結婚相手が県外の人であれば出る。”“親を心配させたくないで、安定した職業に就き、24、25歳くらいには結婚したい”の2項目と結節しているのに対し、時間項目を用いたデンドログラム(Figure1)では“自分の現在”“なりたい仕事となれる仕事は違う”と先に結節シクスター1に含まれていることである。この相違に関すると考えられる、時間項目を用いたデンドログラムに対する対象者の解釈とイメージとして語られた内容を、Table 2に示す。

Table 1 時間項目を用いたデンドログラムに対する対象者の解釈とイメージ(1)

クラスター3 についての対象者の解釈	“うーん...(間)これは、な、自分のなりたいー？仕事ですかねえ” “だい、だい、ずれるだろうけどまあこういうふうにいったらなあーみたいに思って”“(将来的には作家になりたいは)50代か60代ぐらいになればなあど”
クラスター2 (“結婚と仕事は両立できるのか” “子供が生まれた後、仕事を続けるかどうか”の2つの項目を含む)と3の比較	“2番目のグループはー、生活のー、...なんかー、こう、細かいー、心理的な部分でー、で、3番目はやっ、こ、大きくー、人生をとらえた形ーです”“(似ているところは)この‘仕事では自分の実力をー、...正統(対象者記述のまま)に評価されたい’とー、‘なりたい職業があったら努力すべき’をー、ちよつとな、あのー、...(間)ま、努力をー、しようみたいな、かも” “やっぱり、腰掛けのー、仕事ー、...はあまりー、好きーじゃないというかーそういうつもりーはないんで”
クラスター1と3の比較	“なんか3番目のグループのほうかー、自分の意志というかー、なんかそういうー、強いものがあるけどー、上の(クラスター1)は、やっぱりー、...現実的ーな、感じ”
クラスター3と4の比較	“ああ、このー人生設計も作家っていうのもー、こう、親が関連しててー、ええーとー、...なんていうか、小...さいころからー、私が絵を描くのが好きだったのをお母さんがずっとー、認めてほめてくれてたんでー、んー、...で、さ、ふと、絵本作家になったら、いいよーとか、ゆ、にずっと言われてきたんで、まあ、そういうのも関連するしー、”
補足質問での、対象者と実施者のやりとり	実施者“3番目のグループでー、おんなじグループの中に‘過去’と‘未来’がくっついてる” 対象者“あーですよーねー” 実施者“これってあんまりないなあと思ったんですけども” “うんー、普通に時系列で考えたら、過去があって現在があって未来があるじゃないですかー” 対象者“離れてそうなのに” “なんで、こうなった？...(間)はあ、このー、し、作家になりたいってのはやっば昔からー、なりたいと思ってたんでまあー、この‘過去’があると、関連するなーと、...(間)っで未来もー、この作家っていうのはたぶんー、頑張ればできることだと思ってるんでー、まあ、現実化、可能なー、実現可能なことだなあど”

Table 2 時間項目を用いたデンドログラムに対する対象者の解釈とイメージ(2)

クラスター1 についての対象者の解釈	“ああ、仕事一に対する姿勢とか一” “具体的に一、ということがしたいかみたいな”
クラスター1 と 4 (“県外へは出たくない。(仕事の場合)しかし、結婚相手が県外の人であれば出る。”“親を心配させたくない” “安定した職業に就き、24, 25 歳くらいには結婚したい”の 2 つの項目を含む)の比較	“(同じところは)安定した職業というのと一、まあなりたい職業と一、実際なれる、仕事は違うのとかは関連してるかな一と” “(違うところは)うーん...(間)に、思いつかないですね一”
クラスター4 について	“やっぱり外からの評価とか一” “...親一を一、うん、気遣っているというか一、心配させたくないんで” “うーん、やっぱり、無意識にお母さんも一、こう、やっぱり言うんでね、こういうのは” “そういうのが一、...入ってるんじゃないかと” “大学のときも一、県内でっていう一、あれ一、...だったので限定があったので”
補足質問での、対象者と実施者のやりとり	<p>実施者“一番下の一親を心配させたくない” “安定した職業に就き、24, 25 歳くらいには結婚したい” “っていうのが重要度では一番高かった、た一んですよね。これが、一番、大切なんですか?”</p> <p>対象者“はい、やっぱり、わたし、は、早くに父を亡くして一、片親で一、ずっと大学まで一、こさして一、うん、もらったというか、まあ、やっぱり一、恩義を感じてるんで一、うーん、やっぱり心配一したら一、ちょっと一、うーん、わたしもなんか一、なんか一、やだなあと思ってるんで一、ふーん、で、ん、うちは一、▲▲家の本家で一、やっぱり一、... 外面的にも良く見られてるんで一、”</p> <p>実施者“そっか、なるほどな一、ふん、ふん、責任、というか一”</p> <p>対象者“ありますね一、やっぱり”</p> <p>実施者“なるほど...なるほど、...でも‘結婚相手が県外の人であれば出る’?”</p> <p>対象者“まあ、仕方ないと言われて一るかな一で”</p> <p>実施者“これは、例えば、責任がなければ積極的に県外に出たいとかいう気持ちがあるの一?”</p> <p>対象者“はあ一...(間)、へえ一、そう、お母さんよく一、ん、と一、おそらく、わたしは、一人暮らしが、ん、と、(早口で)ちょっと大変だからやめといたほうがいいって言うんで一、つつ一、うん、って、けっこ、そ、結婚相手 2 人と一、ま、家庭を持つのであれば一、たぶん、出ても安心するんじゃないかな一と、一人がやっぱり心配っていう”</p>

クラスター1 については多くは語られていないが、+-0 のイメージから算出された感情(欲求)の強さは0で、葛藤度が4と大きい。クラスター1 の示す職業選択と将来設計は、“現在直面している

問題”として対象者に葛藤を引き起こしていたといえる。一方，“県外へは出たくない。(仕事の場合)しかし、結婚相手が県外の人であれば出る。”“親を心配させたくないで、安定した職業に就き、24, 25 歳くらいには結婚したい”の 2 項目を含むクラスター 4 については、補足質問でのやりとりを含め、母親を心配させたくないという思いと、その背景にある“母親への恩義と世間の目への意識”が語られていた。クラスター 4 の感情(欲求)の強さは 1, 葛藤度は 0.50 と、どちらも小さい。また，“親を心配させたくないで、安定した職業に就き、24, 25 歳くらいには結婚したい”の重要度順位が 1 である。これらから、対象者が，“母親を心配させないこと”を、進路選択における当然の、そして重要な前提として受容していたと考えられる。時間項目を用いた分析によって、クラスター 1 の“現在直面している葛藤”と、クラスター 4 の“対象者にとっての受容済みの前提条件”の 2 つが、切り分けられた構造として示されたといえる。

デンドログラムにおける項目間の結節順序もこのことを裏付ける。時間項目を用いないデンドログラム(Figure2)においては、まず，“県外へは出たくない。(仕事の場合)しかし、結婚相手が県外の人であれば出る。”“親を心配させたくないで、安定した職業に就き、24, 25 歳くらいには結婚したい”の 2 つの項目が結節し、他方，“仕事選びは難しい”“将来設計をすることは、大切だと思う”の 2 つの項目が結節している。これらの結節した 2 組が、さらに互いに結節した後で、次に“福利厚生”と結節している。そして最後に、他の項目からなるクラスターと結節している。つまり、デンドログラムの下に位置する 5 項目が他の項目とは最後までつながらず、別のクラスターを構成していることになる。一方、時間項目を用いたデンドログラム(Figure1)においては、“県外へは出たくない。(仕事の場合)しかし、結婚相手が県外の人であれば出る。”“親を心配させたくないで、安定した職業に就き、24, 25 歳くらいには結婚したい”の 2 つの項目が結節した後、そこに“福利厚生”が結節し、これら 3 項目で構成されるクラスター 4 が、他の項目とは最後までつながらず独立している。時間項目を加えないデンドログラムの場合と比べ、“母親への恩義と世間の目への意識”をより鮮明に際立たせるクラスター構造となっている。進路選択における、対象者にとって当然の前提条件が、現在直面する葛藤と切り分けられて明確に示されたといえる。

以上のように、クラスター構造内の自由連想項目が時間項目との距離にもとづいて布置されることで、対象者の現象世界の探索もまた、時間との関係において進んでゆく。その結果として、対象者の時間的展望が浮かびあがってくるといえよう。

クラスター構造を手がかりとした時間的展望の外在化

既に述べたように、PAC 分析では、クラスター構造という手がかりを対象者に呈示することによって、対象者による自身の内的体験の外在化を助けている。

本研究における上記の過程を、Figure1 のクラスター 3 の解釈を例として説明するならば、次のようになる。このクラスターは、“自分の過去”“自分の未来”“私の人生設計”“将来的には作家になりたい。”“なりたい職業があったら、努力すべきだ。”の 4 項目で構成されている。Table1 の“補足質問での、対象者と実施者のやりとり”にあるように、実施者は、クラスター構造という手がかりによって、クラスター 3 に“過去”“未来”が含まれることの意味を対象者に問いかけることができ、対象者は、“作家が昔からなりたい仕事であった”と語る事ができた。また、“クラスター 3 と 4 の比較”にあるように、対象者は、クラスター間を比較するよう求められたことで“作家になりたくなった理由は、母親が認めほめてくれたことである”と語る事ができた。

クラスター構造を手がかりとして対象者の連想価が高まり、内的体験としての時間的展望の外在

化が促進されたことはもちろん、実施者も、クラスター構造のおかげで、対象者が内的体験を外在化するための手助けを適切に行うことが可能であったといえる。仮に、クラスター構造を呈示することなく対象者の語りを引き出そうとしたならば、対象者の語り、実施者の解釈とも、項目の内容を並べただけの表面的なものに留まってしまった可能性がある。

さらに、各項目単独での＋－0のイメージ評定は、対象者と実施者がクラスター構造のイメージを一緒になって探索した後に行われたものである。したがって、対象者は内的体験を探索した結果を、イメージ評定により数量的な形で外在化することができたといえる。

先行研究において、面接対象者の時間的展望を具体的・客観的な手がかりにもとづいて明らかにしようとした研究として、非行少年への面接調査を報告した河野(1998)がある。河野は、面接場面での“語り”を、“過去を再構築し、未来を形づくっていくために、現在において行なう1つの行動”ととらえ、また、面接場面で被面接者(河野が“被面接者”という語を用いているため、ここではそう表記する)たちが語る事柄を、彼らが自らの内的体験を再構成し、外在化させた物語であるとしてとらえる立場から、被面接者が面接場面で語った言葉の語尾に注目した。そして、“語り”の様式を、用いられた動詞の変換によって区分し、面接場面で語られた事柄に含まれる微妙なニュアンスや被面接者の感情をくみとりながら分析することを試みた。しかしこの手法では、具体的・客観的な手がかりである“言葉の語尾”を得るためには、対象者自身が内的体験を“語り”の形に外在化するまで待たなくてはならず、そこまでの過程を対象者にゆだねることになる。対象者が内界の深い部分まで外在化できるようにするには、それを助ける面接者の高い技量、すなわち、“研究者自身に依存した名人芸的なもの”(日高・吉田, 1981)が必要となる。

それに対し、本研究で用いた PAC 分析は、クラスター構造や重要度順位、連想項目への＋－0のイメージ等によって実施者の技量を補うことができる。特に、対象者による内的体験の外在化、ならびに実施者によるその手助けの段階において、クラスター構造という手がかりを使うことができる。本研究の結果にはこれらの有効性が示されたといえる。

今後の展開

ここまで、時間的展望研究の手法としての“時間項目を用いた PAC 分析”の適用可能性を、時間項目を用いることの有効性、クラスター構造を手がかりとした時間的展望の外在化の有効性、の2点について検討してきた。本研究の結果をふまえ、今後、“時間項目を用いた PAC 分析”を用いて次のような展開を期待できる。

時間的展望の3つの側面と“心理学的場”

PAC 分析では、項目の連想順位、連想内容、連想項目数、重要度順位、デンドログラム、クラスター構造についての対象者の解釈とイメージ、項目単独の＋－0のイメージといった、多種多様な情報を得ることができる(内藤, 1997)。緒言で述べたように、都筑(1999)は、時間的展望を、認知的側面、感情・評価的側面、欲求・動機的側面からなる構造モデルとして示しているが、PAC 分析で得られる情報を用いて、これら複数の側面が時間的展望の総体を構成してゆく様相をとらえることが期待できる。

例として、今回の結果における連想順位1位の項目“福利厚生”を見てみよう。内藤(1997)によれば、連想順位はアクセシビリティに対応し、生起しやすい認知要素の内容を示すとされるため、“福利厚生”は、アクセシビリティの高い項目となる。その一方で、重要度順位は12位と低く、内藤

の説明に従えば、対象者にとって重要ではないことになる。項目単独のイメージは+であり、対象者にとって肯定的な感情価を持つ要素であるが、重要度順位の低さからその感情はあまり強くないと考えられる。

Figure1 のクラスター構造を見ると、“福利厚生”が含まれるクラスター4には、他に2つの項目が含まれる。連想順位はそれぞれ9位、10位と高くはないが、重要度順位は6位、1位と高い。重要度順位1位の“親を心配させたくないので、安定した職業に就き、24、25歳くらいには結婚したい”の中の“安定した職業”の重要性が、“福利厚生”へのアクセシビリティの高さにつながった可能性がある。対象者が“親が心配したら嫌だ”と語った(Table 2)こともこれを裏付ける。“福利厚生”が親を心配させないための安定につながることから、肯定的な感情価となったのであろう。表には記載していないが、対象者は、クラスター2と4を比較して次のように語った。“あの一、子どもを産むのは早いうちがいいってずっと一、お母さんが一、言ってたんで一、それが、たぶん一、この一、早いうちに結婚と一、出産っていうのが関連してるな一”。“(クラスター2と4で違うところは)うーん、と、...(間)ああ、このなりたい職業一があったら努力すべし一、つと一、安定した職業はやっぱ一、相反するな一と、”。ここには、母親が認め勧めてくれた“なりたい職業”に就きたいが、一方で母親を安心させるために“安定した職業に就き、結婚”したいという、2つの相反する動機・欲求が語られている。この相反による葛藤が“福利厚生”へのアクセシビリティの高さをもたらしたと考えることもできる。

ところが、クラスターとしての葛藤度をみると、Figure1のクラスター2、3、4とも大きくはない。その理由は、時間項目を含むクラスター3についての、なりたい職業には“50代か60代ぐらいになればなあ”という語り(Table1)に現れた長期の時間的展望にあると考えることができる。この展望は、葛藤の解消のために生まれた可能性がある。母親を安心させるために“安定した職業に就き、結婚”すれば、母親が認め勧めてくれた“なりたい職業”にただちに就くことはできなくなる。しかし、“なりたい職業”には“50代か60代ぐらい”になってから就けばよいという展望を持つことにより、葛藤は解消される。このことによってクラスター2、3、4の葛藤度が小さくなったことが推察できる。

この例のように、本研究と同じ“時間項目を用いた PAC 分析”を用い、認知、感情(評価)、欲求(動機)が作り出す“心理学的場”(Lewin, 1951)によって事態としての時間的展望が生まれる様相をとらえることが期待できる。

反復実施による時間的展望変容の追跡

既に述べたように、本研究は、“職業生活への移行を目前にした大学生個人の持つ時間的展望”を経時的に追跡するための準備段階として行われたものである。今後、時間項目を用いた PAC 分析を同一対象者に期間を空けて反復実施することによって、対象者のその時々“心理学的場”によって作られる時間的展望の総体が、時間経過とともに変容してゆく過程をとらえることができると考えられる。

ただし、既に述べたように場の理論では、“心理学的な場における何等かの行動または何等かの他の変化は、その時における心理学的場にのみ依存する”(Lewin, 1951)とされる。したがって、時間的展望がまさに変容する様相をとらえるためには、実施時期の適切な選択が重要となる。

引用文献

Cottle, T. J. (1967). The circles test: An investigation of perceptions of temporal

- relatedness and dominance. *Journal of projective techniques & personality assessment*, **31**, 58-71.
- 日高三喜夫・吉田昭久 (1981). Time perspective と Personality との関連 II-現象学的分析-茨城大学教育学部紀要(人文・社会科学・芸術), **30**, 79-95.
- 日瀧淳子 (2008). 高校生と大学生におけるサークル・テストによる時間的展望の検討-時間的態度と精神的健康との関連から- 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, **1(2)**, 11-16.
- 河野荘子 (1998). 非行少年の「語り」の様式からみた時間的展望-バイク窃盗を主訴に来談した高校生の事例を通して- 青年心理学研究, **10**, 48-58.
- Lewin, K. (Edited by Dorwin Cartwright) (1951). *Field Theory in Social Science*. Harper & Brothers.
- (レヴィン K. 猪股佐登留(訳) (1979). 社会科学における場の理論 増補版 誠心書房)
- 内藤哲雄 (1993). 個人別態度構造の分析について 人文科学論集(信州大学人文学部), **27**, 42-69.
- 内藤哲雄 (1997). PAC 分析実施法入門-"個"を科学する新技法への招待 ナカニシヤ出版
- Seginer, R. & Lilach, E. (2004). How adolescents construct their future: the effect of loneliness on future orientation. *Journal of Adolescence*, **27**, 625-643.
- 白井利明 (1989). 現代青年の時間的展望の構造(2) -サークル・テストとライン・テストの結果から- 大阪教育大学紀要 第IV部門, **38(2)**, 183-196.
- 白井利明 (1994a). 時間的展望体験尺度の作成に関する研究 心理学研究, **65**, 54-60.
- 白井利明 (1994b). 大学の進路指導教育に関する実践的研究 -キャリア・カウンセリングの実習を通して- 進路指導研究, **15**, 30-36.
- 白井利明 (1996). 時間的展望とは何か-概念と測定- 松田文子・調枝孝治・甲村和三・神宮英夫・山崎勝之・平伸二(編著) 心理学的時間-その広くて深いなぞ 北大路書房 pp.380-394.
- 白井利明 (2001). 青年の進路選択に及ぼす回想の効果: 変容確認法の開発に関する研究(I) 大阪教育大学紀要. IV, 教育科学, **49**, 133-157.
- 都筑学 (1982). 時間的展望に関する文献的研究 教育心理学研究, **30**, 73-86.
- 都筑学 (1999). 大学生の時間的展望-構造モデルの心理学的検討- 中央大学出版部
- 都筑学 (2007). 大学生の進路選択と時間的展望 縦断的調査にもとづく検討 ナカニシヤ出版